



男

名

考

考

初篇



梅雪

月陰

湖景の河菴の
舟に坐す
まの
老く
舟に
舟に

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in three vertical lines within a rectangular border.

法 聖 子 人



尊朝親王御真蹟

六條道場什物之寫

連歌廿五
不行到佛位

男一

不戀思愛別
不親為知音
不問顯秘書

不禦除災難

不謂叶神龜

不祈延壽命

不耕識田地

不蓄既金玉

不拂無惡念

不遷百回倚

不禁追鬼神

不神分氣坤

不龍渡山海

不習理諸事

不苦遊花月

不老 惡古今
不貴 變高官
不壞 攻遠宅

不覺 明心中
不往 見名所
不捨 逐浮世

不作吟詩哥
不取數草木
不願得安樂

風雲

吏能得去 和歌の流如を
得て連歌の法則を委
あきらめたる毫もなきま
是れ正風の蕉門なるい
ふ家へ 連歌より二十
五徳 阿知能得又同
く阿知能得を狂連歌

一丁佐徳平木乃あつし
 一丁あひふあはそあつし連の歌
 女かか——ひよあつしあつし
 男あつしあつしあつしあつし
 けりあつしあつしあつしあつし
 けりあつしあつしあつしあつし
 けりあつしあつしあつしあつし
 けりあつしあつしあつしあつし
 けりあつしあつしあつしあつし

馳る目見え行るる所謂羊取と
 けりあつしあつしあつしあつし
 けりあつしあつしあつしあつし
 けりあつしあつしあつしあつし

小高朝とるす

後

十古おもきし 祖蔭

東郷の郡の字

此句は

平路の字 宛来

川名

露一斗 葡萄の太府
市や 醸寸 蘇摩
津の火 物志
かけ 猿衣
錦 寺少 里

うまき
凡 主 乃
ちのち 乃 乃
ちのち 乃 乃
ちのち 乃 乃

河原上舟ふり
片舟の
風情を
よみし
月夜

こゝろは
あはれ
男
宿り西陣
来美

上達少佐の妻
くみんを袖
木絨の海軍
月お

一人全名
あを
都
ちう
秋江
五明

勤めよとて
仲しき
飲乃以
盤合ふ
他益
白解

石
子
七
気
何丸

此歌仙を予う仕奉りの頃
撫唐れおし観面
等々の歌もなほしうあはれ
ふ場たうらうのうまの
すみ人々を羨ぶ泉の客と成ぬ
孝ふなわがふるめのとく
月后とやつれと只一人のみ

おとふよ長く暮る乃こまよ
ひおれさなま衣魚の禍頑
嵐乃痴も如中しれそこの
字法の口元は俯へたに境
人しよもむなのめうし
の昔を志ぬたうじみは
たうし先其
たうし先其

次の折みむわめて古明寒松
 及びの四むれ君子のもあなれ
 と一巻をあらと二曲のふそく
 むらぬれんよふししやうは
 のそえてそ来むじと乃
 男中減ふあゝいむじと今
 ろう心くるめめをそいふ

俳諧男力草紙 初篇

東武 月院社著

浪りつゝ酔入春も。舞いあふ^{ノキメ} 師凡
 夏中つふれておひー是の夏、^{ノコシ} 唱南
 よい元とつあや梅えの人の事て、^{ノコシ} 可貞
 角唐す糸やすけとよの月、^{ノコシ} 唱貞
 本風をさるよせぬふりさかをさ、^{ノコシ} 文舟
 一人してつるけさふりふの巻、^{ノコシ} 刺李
 一斗時入鯉けさふてのけしあ、^{ノコシ} 石松

名厚ハ、カシノ川 名厚ハ、カシノ川 名厚ハ、カシノ川
 大伴おるも、カシノ川 大伴おるも、カシノ川 大伴おるも、カシノ川
 川越中、カシノ川 川越中、カシノ川 川越中、カシノ川
 ちり木の、カシノ川 ちり木の、カシノ川 ちり木の、カシノ川
 貝売も、カシノ川 貝売も、カシノ川 貝売も、カシノ川
 標、カシノ川 標、カシノ川 標、カシノ川
 袷、カシノ川 袷、カシノ川 袷、カシノ川
 大佛、カシノ川 大佛、カシノ川 大佛、カシノ川
 胡戸、カシノ川 胡戸、カシノ川 胡戸、カシノ川
 砂、カシノ川 砂、カシノ川 砂、カシノ川
 杏、カシノ川 杏、カシノ川 杏、カシノ川

カ

根、カシノ川 根、カシノ川 根、カシノ川
 新、カシノ川 新、カシノ川 新、カシノ川
 楳、カシノ川 楳、カシノ川 楳、カシノ川
 ち、カシノ川 ち、カシノ川 ち、カシノ川
 作、カシノ川 作、カシノ川 作、カシノ川
 上、カシノ川 上、カシノ川 上、カシノ川
 善、カシノ川 善、カシノ川 善、カシノ川
 禱、カシノ川 禱、カシノ川 禱、カシノ川
 黄、カシノ川 黄、カシノ川 黄、カシノ川
 竹、カシノ川 竹、カシノ川 竹、カシノ川
 か、カシノ川 か、カシノ川 か、カシノ川

カシノ川 林友
カシノ川 二川
カシノ川 章文
カシノ川 重考
カシノ川 菊二
カシノ川 有文
カシノ川 標可
カシノ川 枝鳩
カシノ川 兔月
カシノ川 凉凡
カシノ川 梅記
カシノ川 其扇
カシノ川 兵宗
カシノ川 南桂
カシノ川 六川
カシノ川 為春
カシノ川 楚雀
カシノ川 伊波
カシノ川 双丸見
カシノ川 珀笑
カシノ川 空義
カシノ川 田敬

浦内をまわぬまきや花柳 六ノ二 双伶保
梅のや村一人は門のまき色、 湖曉
木々のけ人 里まゝくせを仔子 相川 臥
男もまゝと遠入なき橋のうへ 立舟 観山

のい〜と名い切るるも 九ノ七 雲園
春もやわりの夕いより入る 女史 清子
迎道中 勢入 墨入 剣 通り、 抱儀

初春

梅のや 袴も雨と守 日一 日 南ノ六 寛北
後の月 年入るるのまは似るまき 文北

天地の垢もまの川て春のま 志厚
凡そ〜とやのふまは和竹の色 翠羽
水車おき〜と 青はま〜と 播磨 播磨
ま〜と〜と ためぬ 回ま〜と 彼もま、 仙芝
年〜と〜と 折ま〜と 翠離、 子将

春の想

春と暮つみ中 ちつと 時道 御
空青く 長糸 袴もま〜と〜と 汶柳
手拍子 鹿む 春の月 何凡
智度
お月の中 お碎るる 火お石 九曉子

春の客入の星もなげ川つ〜
飛大タテ 九如
 旅人はふぬふとさせぬ情も哉、
 松戸
 多くみちなき頃への簾や春の空、
 芒得
 六月入遠入口わらう胡の山、
 景鶴
 迹木はよけふ又見え布毒の風、
 雀道
 押せも明く戸を敲き多
戸丸山 双山
 山名は尾中川ま布々
 士先
 尾玉の吹まひさる小寸今日月、
 荻葉
 百年和秋も世話なき百世家、
 看之
 蝶のまて折も折下谷き卒塔婆
 之愿
 多しも泉中春兼てふや
 公石

初年やわ方一ふの 大かすみ
鵬命共
 石月や石此教えゆるまき
蜀山人
 風中唐源く尾心と杖の姿がき
谷文晁
 門本素ねりふさるは寺
山芳川
 梅咲和等にも歩つ、福
抱上人

老情

火燧ふちきくねる心
戸 元風
 ぬれて行ふ此布職
月 茅鎌
 追備まをすのり
怒北 牛山
 舟まの心地もあめ
冬月 曙堂
 ちるも入あ八た
冬月 東指

枕心もあはれい乃不うか、大坂 奇劇
 人殺小はるぬ酒買ふ所梅が、越前 板亭
 る此素八もといひくし不而木、ハル 方雅
 桃の雛中ちろいさきの押爪あり、武 春嶽
 る志ちし山田入持も春の色、武 寄松
 春子おきれし梅もあき山也哉、武 文冥
 雪此梅りて枝乃ありくし文、イカ 天口
 曙やより数多々州入り、越前 画陵
 立させて見てゆく雛の使計、江戸 巴水
 却月乗杉中そそあ志度の掃、イヨ倉 其梅
 旅人も是とあまきり破れしに、ハカ 應苞

昔や勝乃持りあふまゝし、信濃 魯石
 新りの里や抱も梅山し、信濃 弁北
 殺あぬ玉の多物中信濃む免、信濃 玉芝
 一の持入り合ふ之言あり梅、本末 燧撰
 るそとくし、本末 芳步
 梅燈やあし新し、仙大 路玉
 刀まて細身なをりあり不子る、仙大 士由
 葉様り不又入茶屋のあふあり、信西 南山
 形起し了り徳あり、信西 斗石
 白のや土下への福もやしは降る、行脚 魯川
 足はふ育るかまきりけしき寸、行脚 五芳

春行中那智入山やうたう人 信石村 白糸
 夕霧のやまに馬乃竹をさし
 遠勝乃橋 中一列々切り交、 鉄女
 夕霧のやまに馬乃竹をさし、 甘青
 杏露中月をさすを財の傳、 固睦
 炭焼此事をさしあや一ツ清、 木奈 南陵
 橋をさしあやまをさしむらさき、 芝曉
 燈のやまに馬乃竹をさし、 松香
 松露小るやまをさし、 東居
 白旗の隣せにや一列 訓、 東極
 腰のやまに馬乃竹をさし、 会原

菅のやまに馬乃竹をさし、 南南
 鈴のやまに馬乃竹をさし、 上山
 竹の根を肥て元肥せり、 雨石
 豆種も馬乃竹をさし、 一丸
 妹のやまに馬乃竹をさし、 勢竹
 昂事
 投筆乃百もけり、 星僧 大坂
 冬のもてあけぬ、 観山 アキタ
 其標乃下り、 むく座 糸
 夕陽れ尾をさし、 泉窟 越シタ
 酔ふる服れをさし、 自放

竊思も中東入謀此又やのほく 刀キタ 里曉
 州のややいよと毒て見る月と宗 湖度
 夕鐘より嵐のよ〜〜 柳の菊も露、 奇泉
 有明もあ〜〜 道〜 神の舟方、 松枝
 世も嬉〜折ふあれ〜も不のよ、 連和
 修初ふも〜思ふあふもあも、 借帆
 海山入るも〜や〜離ま〜つ〜、 子仙
 一〜故れ廣〜於あ〜り〜の月、 不錦
 春の露法〜も〜〜〜〜〜〜ぬ、 霍山
 門川や毒付〜〜〜〜〜〜秋の言、 不固
 分列入る〜祝身や〜毒あ〜格、 霍托

春三月嬉〜嬉も〜中〜〜〜
 世も安〜〜も〜湯さすも買ふも買、 佳京
 交州、毒酒あ〜〜〜〜〜〜、 柳楊
 しみ出〜〜。中〜〜も〜も〜〜〜。木主 文冥

春日事

世〜〜〜中〜〜〜〜〜の閑〜〜 アキタ 秋窓
 名月や初〜〜〜〜〜此〜〜〜〜 シホタ 青藍
 州のややあ〜〜〜〜〜〜〜〜 ハセ 素来
 凡ぬ〜〜〜中州のほれ〜〜〜 ヒカ 樽山
 初〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜山、 旭菜
 伐〜〜〜竹や〜〜〜〜〜〜の月 上サ 里丸

初雪のつゆ〜と磯の波
 公文可代時斗輝け〜志賀の寺
 末節やよ〜日入あ〜る志賀の寺
 名董風も信小中〜ま〜とひをまひ
 秋の夕持るま〜のま〜子なるまひ
 惟展入〜るま〜すあり〜林の風
 前ね鞠れ歌〜中あ〜あま〜牡丹が
 や〜〜〜入事〜の月〜ま〜とひをまひ
 厚も中暑さ〜ま〜すれ〜わ〜る雲
 雪れ日中朽〜るも〜板〜ま〜山のの
 石山乃月〜中〜ま〜を〜ぬ〜ど〜し〜と〜あり

元風

元曉子

元雄子

元幸

白鳥

元芝

酒女

元空

凡友

文谷

山響〜〜〜〜〜眠〜〜百合のふ
 牝の香〜〜〜〜〜角〜〜〜〜〜月影〜
 晴音入〜る〜〜〜〜〜や〜〜〜〜〜乃〜〜〜
 那も山も〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜
 中〜〜〜〜〜又〜〜〜〜〜鳴〜〜〜〜〜を〜〜〜
 六月〜〜〜〜〜車〜〜〜〜〜す〜〜〜〜〜
 中〜〜〜〜〜吹〜〜〜〜〜初〜〜〜〜〜
 葉もも〜る〜の〜床〜〜〜〜〜切〜〜〜
 庭を〜〜〜〜〜ふ〜〜〜〜〜花〜〜〜〜〜
 其の末れりや街れ青月影
 糸の山巾のふ通〜〜〜〜〜る〜〜〜〜〜

万機

文桂

曉音

佳夕

巻砂

又賀

其水

水冠

元院

文家

曉餅

龍のくもり 袖味争の套の乳
 さくらをく 吟をるも 吟 不虎
 橋弁中 録少 妙得ノ 姉ノ 妹
 大和 野ノ 心 大 心 心 心 心 心
 春の 中 野 心 心 心 心 心 心
 山 心 心 心 心 心 心 心 心
 汗 心 心 心 心 心 心 心 心
 陽 心 心 心 心 心 心 心 心
 お 心 心 心 心 心 心 心 心
 る 心 心 心 心 心 心 心 心
 川 心 心 心 心 心 心 心 心

子 心 心 心 心 心 心 心 心
 又 心 心 心 心 心 心 心 心
 世 心 心 心 心 心 心 心 心
 初 心 心 心 心 心 心 心 心
 学 心 心 心 心 心 心 心 心
 行 心 心 心 心 心 心 心 心
 青 心 心 心 心 心 心 心 心
 一 心 心 心 心 心 心 心 心
 尺 心 心 心 心 心 心 心 心
 弟 心 心 心 心 心 心 心 心
 志 心 心 心 心 心 心 心 心

文之
 仕存
 寅申
 以文
 智店
 葛山
 由心
 龜崎
 幽山
 常春
 莫隨

山系多や寺あり竹とまきら 龍ヒメチ 服石
 志し重し赤岩を 龍よ白 振子 湖炭
 梅ありきうさう海より戸口寺 クニツ 月陰
 石りぬきや春も雪も 岸山田 壺仙
 給えてあそびし 雁子 雁子寺 九曉子
 枕尻此行先 雁子寺の 声 ハシ 抱侯
 野を 沢より
 寂しき 隠す寺あり 子寺も、 堀亭
 かゝるや 鎌倉の 影入り 男あり、 寒松
 馬ありて ありて ありて 其雪
 二百二十日 ともかく やふ月 仙路

下牛代 渡や 多しや 喘牛、 九尻
 樹の 影あり ありの ありて 山
 湖を ありて 山は 二月 吾梅
 了 庵あり ありて ありて 楓之
 福川や ありの上 ありて 系 チコフ 嶺松
 山吹や ありて ありて 系 チコフ 九民
 空ありし ありて ありて 系 チコフ 西道
 牛ありし ありて ありて 系 チコフ 壺仙
 山寺あり ありて ありて 系 チコフ 文州
 山寺あり ありて ありて 系 チコフ 櫻莫

松葉かゝ人の心ゆく處にまかり、
 行偏よりく集まるともをききしす、
 澄。初もあふるさや 女らり 水、
 州の糸もゆるらふもまきさかりが、
 橋を弄れやまけむのよき 雀、
 心得て時山悠々 神 おくく、
 くら折やあはれくもつらう 雀、
 吹ぬく玉丸入 庭もあし 志賀の舟、
 忍しむる夏遊おし づ峰の風、
 杉人の心えとんくも せ、
 水音やいそよ文ー かつく石、
 賣雪

寛山

寛凡

寛笑

寛志

寛雄

孰長

寛雄

野揚

九華

松卯

賣雪

一葉のちりさきも 似たり 糸の月、
 夕々も 砂運のまかり なるれ 声、
 各月や 九糸ハ 糸此 田今め、
 名月や 木々も 舞い ちりぬりの、
 糸窓も 頼も ちりて ちりしの月、
 丸 花 又よ 二日 あり ちり 春の、
 劫も ちり ちり ちり ちり 残、
 ちり ちり ちり ちり ちり ちり、
 花 葉 入 ちり ちり ちり ちり、
 義 時 中 月 入 ちり ちり ちり ちり、
 鏡 中 ちり ちり ちり ちり ちり ちり、
 天燈
 源隆
 不凹
 車凡
 孰凡
 宗山
 久山
 行水
 古窓
 卜春
 指年

天燈

源隆

不凹

車凡

孰凡

宗山

久山

行水

古窓

卜春

指年

雁足北のしや亭や中村の子 越シツテ 鷗舄
 二人涼む氣あり竹籬 ワタ 石柴
 秋まや冥乃花了月のおよふ 尾川 環山
 ふまふま春のそと文もも咲 上ヶ本田 毛々
 初月乃声涼下和酒利酒 江戸 理室
 介様小亭の處かやまあり チノフ 殿松
 降しえ降爪雪由入雪あふ外太 信平出 曾史
 晴まや花定ぬより法師 半礼 梅意
 行春乃亭やる者北貫川 越シツテ 其儼
 梅よりあけ梅よりふれて長者ぞ 越シツテ 爽亦
 きぬくや里も八日乃禱の声 小化 古連

風は先りて又まゝ山もまゝ、 ロア 換村
 春之アや志すも山居や 家の音 窓梅
 秋まよひあつた入ある 晴くあ新 味月
 てもとくそーらぬ 秋を 秋暑
 早よりつてあまき 秋の音 翠玉
 露ふゆりやあまき 秋の音 雪溪
 老の秋もそとあまき 秋の音 妙雪
 るれ事入りそとあまき 秋の音 玄雅
 後庭中梅かきや 秋の音 流慧
 鶴邸北照りす 秋の音 赤月
 青梅よりあまき 秋の音 丸松

暮の橋より来る袖つゝかき取りて
 乙調
 不仕戸を叩て衣しき人き誰
 文措
 短衣也きも考比なきのみ
 行徳 東几
 仙大 国秀
 伴ノ末れ志まんとやや青あざし
 天々
 つさよの春井啼やーの山
 系 月居
 秋の目より居そと 所まきま
 九女
 紫園
 奈くく井の氷すまき 桐の枝、
 抱候
 奈凡くよりうづあり 遠 礎、
 初新くー春まの相根を越えり、
 以研
 嘗れあれして事より機之音
 土先
 夕煙くくもまき白ー、
 清子

十九

采古き乳を呑ふとほふ似し
 信 白新
 老くもふく死ふ逢ふり
 我 杉亭
 采古きつげや心なきはの木
 晒堂
 赤くくいそく 穢なきあふふ之玉粟
 白戸 舞美
 旅人の扇志らうれ石二語
 脚場
 舟もきゆきう降りても海は
 小舟人
 川返を録ふくししるをるふ
 一縁
 石むのうと夕日の赤しし喜の山
 ヒメチ 七友
 心あつたあも暇らしし月を青戸
 菜車
 杉の根を鳥の垢や
 千々 巖松
 樹くくたよ石を打くくもる
 糸地

鳴るる也若き子元の押さるる 本庄 幽山
 去つるもと跡乃痛くつのも月 作古せ 彩里
 歩むるも煙をくせしりり 初秋 春翠
 骨所明りしありぬ布生雪 越 画陵
 名流を傳つて自致も色色 江戸 元風
 風流や細解て存る 冠管 元曉子
 吟吟や徳地不月かきうら り 元雄子
 ちやあふも秋波来るる 一氣流 武 蟬院
 蟬院く常又せんり 新の布 桃笑
 名自や荷小園 の篠 けら 久六 松楊
 阿多子甲うるうら り 羽く 江 九文女 紫園

楊うけて盗人 く 氏 ま 杉杜
 美しさをたの む 碁 新 碁 院 碁 寛
 栗飯より の 清き く 也 之 所 イヨ 其梅
七劫大鏡を
 月あふ の くれぬ の 月院社 仙田谷 春潭
 只病ても 復 之 文 之 去 夜 降 子 榮山
 朝風や 春 と 春 と 流 中 も 吹 子 陽谷
 雨古も 磁 石 の ぬ れ て 止 小 り 子 將
 芥小 の 是 致 活 小 高 蒲 之 か 元三平
 多 是 然 鞠 子 ス 々 々 去 来 之 都 士先
 秋乃 常 智 う 十 行 ぬ れ て 消 小 庵 窓梅

信濃此月のまじしちる家ありあ
一枝とて花あふはれり夕梅
月入しと名もあき山を遠く見
庵の初や橋州香よあく嵐
多敷もくと記五時のまゝ真衣
指のけし吹しとあや花の露
花ふもつとくちむひの本芽代
まきまやあよ延くちり孕くちり
相あにふくすくえんりのま月面
あふしとまきく射て梅よ花もあ
刈ゆされし枯芦や雪の中

信越、
南山、
斗石、
魯川、
清子、
江、
有破、
洞弘、
玉洗、
梨月、
京、
宮雄、
井眉、
屋烏、
大坂、
江、
長新、
宜麦、
秋窓、
太節、
学笠、
太橋、
抱依、
行脚、
アキタ、
大坂、
京、
大坂、
山

赤のまや戸を数むもまきりて
あまのたひひらひらとぬまの
花あくと胸うちまきく萱の
紅毒やありくあも梅とくちり
梅あふささのまじしちるの遠あき
まきりて世界れまやまのま
あまの思も真のひらひらと
あまも春あり風の吹もあ
あまもてみあうらむきぬまの山
鶴二つ魚あ中候まきり日く柳
魚は腸控ふあこれハ雪の峰

京、
宮雄、
井眉、
屋烏、
大坂、
江、
長新、
宜麦、
秋窓、
太節、
学笠、
太橋、
抱依、
行脚、
アキタ、
大坂、
京、
大坂、
山

人の来て又縁を遠しき社母
隅ありて版を以てをふれ
ふむめのきしりたるくぬき
石よりぬきしりたるくぬき
陸路やまれのしりたるくぬき
花とむもをむねちしりたる
まをえや葉よまけりたる朝極
軒又れ元二束ありりたる椿
報日も隙持ぬやみそをたる
生は嵐も及ぼりたるたつき武
阿そと家乃のちをぬきききり

ワシマ 曙堂
ミタ 東指
イヨ 寄松
ホタ 壺仙
アミ 其松
京 青藍
ハコ 千紙
越 蒼乳
江戸 寛地
杉亭
應色

物老の言や遠野にそをるり
たる花や枝のまををりたる
たのありて代有明乃りたる
おまはれや雪を白し峰の松
いつ近もまををりたる山うの

子將
貞秀
一峰
寥和
桂水

漁念三

尾寺ふりたるも此有しりたる
細さけて夜川をりたるも
志す秋ふれの日隅をりたる
庭のて西ありりたるも
子も木をりたるも

端亭
嶽月
窓梅
舞竹
東西

編戸もさ〜ぬ宗濤うぬも
坐敷の乞食二人小茶を焼く
舍利會は鐘を合点して字
斤町ハ古多様をける月の秋
娘を取〜園もひ〜く〜
祚の代を何もて盛〜はちや
子起せ〜と〜
鍋蓋もふれぬ屯の白く時
麻石のや〜乃〜

舎山丸 舎山丸 舎山丸

老懐

家おらう泥の田畑〜
垣子柿あり〜風おとる
多程の私れ〜
響成磨〜
肉庭子柿を〜
花〜
〜
〜
〜

民玉

何丸 玉 丸 玉 丸 玉 三

揚枝不きく蒲団を巻む
碁盤に碁石を笑つれ
重く吹くをる月の明くち
時多うらふ前より唱校又
初よりうに幣きけけ筒
此本貞お人の命よけり
端のたえく花の世話き
久方のおきき月日は新れ
常陸のく初子侍のみ

玉丸 玉丸 玉丸 玉丸 玉丸 玉丸

涼しき和纏を物のとり
樽よ合歡の味りりえ
善妙りも敵も縁や直り
鞆もまきぬ馬にわ様煙
永修おき此う物さよの
焼帛の香よ狭き山に
豆解お小秋の思さよ
雅よさよひ帛の刻り終
虎のある碁を小きふさ

元風
仲丸
風丸 風丸 風丸 風丸 風丸 風丸

春一トの人の世を
氷の画をさしゆく
あまの尾まゝなる
待音はたか
玉の代す
跡先小角
首花蒲花
入のた
まらる

風丸風丸風丸風丸

良辰破鳥のあ
拂曉の体と

名の月も
勢は
世ふ
あま
涼
桐
縁
海

若海
仲丸
海丸
海丸
丸

五言也もあしり猶ある能く人
菰穂るるとふ魚よよふも代
世嘉祥へ古語を傳へる公筆の唱
ハ其の勢よつゝ産まをメ
相の名も唐めりたる月の若
唐花の膏岳をそりり
山田吉傳初の名もたこられ
洲を地ゆる里のそりめを
いつちあき牛の歩けもむ整
物をけりり馬昇の肩

丸 海 丸 海 丸 海 丸 海 丸 海

楊子のあしり波ゆるま風ふ
是も定き雄のやをよやふみ
粘を飾る妻太り息子直送
自由けりりる綱の切臺
形骸の志ろりる人隠れり
温泉花の自れ山津乃水
層あはれ梅の志もあはれ
そあのかかりと葉の梅を願
う記事紙をぬ下女のそる笑

丸 海 丸 海 丸 海 丸 海 丸 海



戸のロリ
山形見へて
月涼

葛松并
東田

万葉草の音ものこもこ
 唯位牌ふそく月のみさし
 芦の穂分る舟の志なり
 冬枯の念よ全き櫂の音
 昔よ易てたうるそく他
 分持の人足麻か冥乃前
 柳のこころよ何うめくらむ
 世の中や下戸よ下戸の志
 流念をよむ喜のつゆ

海 丸 海 丸 海 丸 海 丸 海

彩^{らう}く^くし^し、お^おの^の彩^{さい}海^{かい}り 奥川又 東^東旧^旧
 や、し^し出^出て^て中^{ちゆう}よ^よぬ^ぬれ^れる^る葉^えの^の日^ひ、 曉^{あけ}里^り
 衣^いを^を涼^{すず}め^めく^くし^しり^りを^を五^ご月^{げつ}雨^{あめ}、 壽^{じゆう}山^{さん}
 涼^{すず}し^しさを^を押^おせ^せる^る月^{つき}の^の戸^{かど}は、 金^{かね}店^{てん}
 赤^{あか}よ^よ赤^{あか}の^の彩^{さい}さ^さら^らぬ^ぬお^おこ^こち^ち利^り明^{めい}、 志^し計^{けい}里^り
 梅^{うめ}の^の香^か子^こま^ま少^{すく}少^{すく}り^りて^て出^でき^きる^る彩^{さい}の^の月^{つき}、 東^東居^き
 面^{おもて}白^{しろ}泥^{どろ}お^お子^こま^ま少^{すく}少^{すく}り^りて^て出^でき^きる^る彩^{さい}の^の月^{つき}、 緑^{ろく}毛^{もう}
 足^{あし}ゆる^{ゆる}そ^そや^や遠^{とほ}沖^{おほ}の^の朝^{あさ}を^をみ、 東^東其^き
 夕^{ゆふ}風^{かぜ}の^のち^ちら^らく^くも^も知^しる^る鴨^鴨の^の腹^{はら}、 雁^雁四^四
 簾^{れん}々^々や^やし^し唇^{くちびる}を^を一^{ひと}枚^{まい}の^の月^{つき}、 詩^し丸^{まる}
 夕^{ゆふ}山^{さん}よ^よ日^ひ和^わか^かく^く深^{ふか}く^くお^おも^もい^いて 東旧女子 歌^{うた}

薰^{かほ}も^もや^や梅^{うめ}の^の一^{ひと}葉^えも^も門^{かど}の^の塵^{ちり} 江戸 松^{まつ}人^{ひと}
 室^{むろ}の^の戸^{かど}を^をぬ^ぬき^きて^てさ^さや^やか^かの^の月^{つき} 夕六 形^{かたち}楊^{よう}
 赤^{あか}者^{もの}ら^らく^く房^{ふさ}も^も余^{あま}の^の木^きの^の葉^え アイト 如^{ごと}髮^{かみ}
 時^{とき}あ^あり^りや^や二^{ふた}三^{さん}え^える^る花^{はな}の^の心^{こころ} 笑 路^{みち}玉^{たま}
 是^{こゝ}南^{みなみ}大^{おほ}池^{いけ}の^のや^やも^もみ^みを^をつ^つじ アキタ 扇^{あふぎ}風^{かぜ}
 子^この^の衣^いは^はひ^ひを^をぬ^ぬき^きて^てさ^さや^やか^かの^の月^{つき} アキタ 里^{さと}晴^{はる}
 吟^{ぎん}し^しを^を一^{ひと}津^つ出^でさ^さを^をり^り屏^{びん}り^り雨^{あめ} 江戸 元^{もと}曉^{あけ}子^こ
 故^{こゝ}に^に遠^{とほ}を^をと^とれ^れま^まの^の際^{さい}を^を見^み 江戸 孝^{たか}雄^{ゆう}子^こ
 直^{ただ}新^{あらた}の^の赤^{あか}く^くも^もえ^える^る春^{はる}水^{みづ}の^の 江戸 吟^{ぎん}秋^{あき}
 言^{こと}の^の意^いや^や氣^きの^のた^たれ^れる^るま^まの^の心^{こころ} 江戸 一^{ひと}丸^{まる}
 秋^{あき}の^の風^{かぜ}作^{つく}れ^れる^るま^まの^の心^{こころ} 本庄 幽^{ゆう}山^{さん}

新まてな照そふもの花梅小月
 萩をまゝい人う心静も花の塵
 惟ねと押合ふさや和神送り
 初浴や刀印乃之の以曇り
 夕まのこそ地よあつく雀くち
 貝割地ちくろくはくろく春
 夕粧いすゝや時雨の嵐山
 屯あやあやもきまよと心たぬ
 長風花の申くく引和昔の花
 梅咲也木馬あゆみの子らも来て
 おくれまはれ我まゝくろく天の網

江戸 旭葉
大坂 足彦
ヲリ 岳路
アキタ 渭南
 着之
 窓梅
江戸 岷月
 芝山

抱ふく程居ふりり三冠あや
 自折ゆものあゝ枝あし梅の花
 古給未ま子の葉ふもをとりり空
 屯あゝく雲もきあ持つ松売民
 柴の戸や若き子あゝ心あゝ春
 春の風月言花たれあゝりり
 花の香や梅よらそふ人うき
 ちて清久やうふ行あり秋の露
 赤ものゆりそゝる信も秋の氷
 互心籠やうあもあゝるねひり言
 藤の鏡も小雲行りり一の聲

十カサキ 蓑
ハタテ 幽喃
本ま 布席
江戸 冥
京 一舟
信 国南
江戸 木價
信 昌曉
江戸 元風
 元雄子

其家寺の椿咲きし後もあは
只咲て只そぬる深山さささうふ
其久くし様ハ初のううおま
ツシニ 曙堂
京 定雅
里秀 志了

山里ありてめ腐離別の所

それくの中ふ秋なる木穢く申
朝鮮 朴徳源

長山寄藤泊二句

えくく扇ふする花もあま様哉
月凄し後ろふ志あま釜山海
岸ふ絶ぬききく浦清氷
多々徳の田あふ屋系ゆりう郎
あふれ子落葉の音や夏の先
京 劉士元
京 沉貞山
京 十六
越三ツツ 元曉子
宇弘

皮剥り給飯さくし柳あはる
松葉のはきも春は自ひり
周防 日新
イッ 巢鳩

世業のいし海あき哉

あまふる浮世の音よ聴ては
寄持て萩も且らあつらき
新影も木槿も同し西の京
湖舟た月れはう里あまき
百反の蘆の音さし神嵐
秋立や心淋しきさる乃菓
抱きし子然笑ひたり新あやめ
旅日記ふともし危き難喉
アキタ 可貞
京 其成
アヲミ 鳥頂
タニハ 性柳
江戸 羽
アキタ 涼風
江戸 其雲
隅四丸

山吹の淵をまはして樓のありく
高松のゆきも山吹や杜宇
夕衣をうらり帯をうらせぬ
春風乃もも塵ありけり中

大和川まで

川舟に舟を流しや杜宇
鳴鶴のこゝろ死なむ何れも
早ひつらつら秋鶴川の志は死
死むこゝろのこゝろ秋の暮
潮の言はれぬ乃もまよこゝろ

あちきあちきあちきあちき
兼指のたゞたはるや夕月
きぬく打人きく秋の早うふ
虫鳴やけいこふ布も秋の小夜
夏の夜や有れやある非流
茶芝しらすあま月秋は半ふり
秋持うららや梅も茶の羽織
山人のまよきぬけや露の露
秋風の屋きく秋の草うら
いつら夜を秋月を昔は乃ら
山もや早も後る夜をいつら

江戸

士先

信

警雲

庄舟

白舟

江戸

大坂

蝸亭

阿波

魯隱

江戸

隱谷

女史

桑鬼

清子

信

抱依

子々

自耕

江戸

其扇

江戸

玉屑

サヌキ

元曉子

ツミマ

茂推

ハル

晴堂

アラミ

寛地

茶雄子

申舟

口先子こころ重なり昔の春の
あし寸時雨のりさうふ冬麻
切拵乃末木も春の白ひう車
山の片の一端えゆる芒う車
春風やさういそこの木の月
信 一カ
信 抱俊
江戸 雨塘
下ツカ 窓梅
江戸 窓梅
越 峯月
本急たつれらをつらつら氷

信 糸地
子寅
斗石
梅尾片 一箇早
伊カ 士得
信 魯川
江戸 抱俊
下ツカ 雨塘
江戸 窓梅
越 峯月
画陵

春の月のかげりや比は西
さひしき紙猪うあつく枯葉
枯も花も逃れむ免乃りたあ
春のや宿の一番よまこ
時信 やあのかの人のよつく
風からき麦の葉をえやも海
涙も海や壺ふかくし破の鞘
夜のまゝ入るまゝしやまてさへ免
小峯嶮やふれてまきまを梅まゐる
いはうの四十の海や鮎あく
そよりのともあつる魚ぬねや野の

江戸 子常
アキタ 朗亭
ヤミト 民兒
行陸 木寿
ウツノ末 東凡
大坂 曉鳥
純子 自乐
江戸 桂凡
文桂
舞美
暁花

おしせきしはあふり秋の暮

ミカハ

卓池

勢田乃社氏

実極の粒く志きよ節の月

江戸

端亭

風もも枝も柳の始末う歌

ミカハ

化成

る床貝は口よあゆや其の尾

ミカハ

子将

房や玉月乃きりもあのみ

ミカハ

子黄

ま雨沢をえや名よあふ稲若山

ミカハ

抱依

林極くもも云ぬぬまぬ武

ミカハ

秋奉

山のきくあむもあふてお義

江戸

元晴子

鎌倉は名小辰切しし武

江戸

佳夕

月きし誰すも度そい生の吉

江戸

齋砂

埋火の口や牡丹はほむとん

大

士由

ちりたかる梅霞乃やあのみ

梅ヶ山

李朝

木きけも末枯時や后の月

江戸

清子

明月や梅くまもはるより

九文女

紫園

二日月はあやまよと晴し

イセ

元風

はをふぬく乙女もをむまき

イセ

椿堂

花あふぬ有明月や蝶の床

江戸

紫園

色くよ日影うけも新う柳

江戸

松燈

あそ子や旅のまらもまき

江戸

詠序

一日の汗清湖あふり

江戸

其水

るつあけ樹あふり危妻の山

江戸

水雲

海に舟をこし 柳に舟をこし 舟をこし
林の香や 去る人の人たきく 舟
舟もたきく 舟もたきく 舟もたきく
舟もたきく 舟もたきく 舟もたきく
舟もたきく 舟もたきく 舟もたきく
舟もたきく 舟もたきく 舟もたきく
舟もたきく 舟もたきく 舟もたきく

菊川よそ

夏菊は香気長きあそびあり
春雨や 酒代笠きし人ひり
つゝつゝ 桂ハ月の的居りふ

越

杉亭

信

南山

キ

根

ハ

因山

ハ

文也

ハ

志厚

ハ

元雄子

ハ

抱俊

ハ

赤地

江戸

蝸亭

ハ

抱俊

信

赤地

院の鐘ちくくふ 林の鼓
舟版をくく 氣よ志く 柳うふ
舟猫のあそび 舟彼乃板底
舟急泊や 橋山乃日初や
猿の舞を 舟し 舟し 舟公
舟あそび 舟酒あり 舟の舟
舟室の舟 舟清し 舟年の舟大
舟る舟よ 舟舟舟舟 舟秋の舟
舟舟の舟 舟舟舟舟 舟舟舟舟
舟舟舟舟 舟舟舟舟 舟舟舟舟
舟舟舟舟 舟舟舟舟 舟舟舟舟

大

西河

江戸

元澄

里

元江

越

暁鳥

越

舟文

江戸

舟美

足

旭菜

信

志厚

信

宗二

ハ

舟石

ハ

舟門

山麓湯子夜のこもりし初陣
膝まゝの形のつれなき冬の雨
細ぢや美くくはる歳故人
急抱くぬくぬれはま露
鼻先の山をゆくは秋のふ
田舎も春月の熊乃教はせし
ちとる岩のつらましく砂まきられ危
石ニまじしきのふは春の又もゆる
芦の穂や戸口寂びく梓巫女
ゆりくは月剣のけるはる民
あはれそや子も一言のり

フカヤ 貞秀
信 魯川
下サハ日市 麦雨
江戸 久藏
理堂
里秀 曉春
行脚 久幸
碓嶺
江戸 元曉子
抱飲
訖子 李峰

筆や木音は細りもきののこ
木海老の湯もささや秋の月
端うけて燕子切ふも露のふ
こもるくはるはもくそは中
洞代も春よはふ月をのそく
まよ入懐ふををくれ半時
世の情や人よりまき草花南や
長閑さや花もぬくもはのこ
大根引自慢ふ連 男童
まよの物ニあもあはれ中
流庵うらまをまといふやまの庵

ハリニ 文御
江戸 文谷
フセシ 暁軒
ハメ井 柳後
信イナ 秋香
信イナ 氏玉
信イナ 藤齡
ハ朗
自耕
改来
画陵

あまををききて毎れいたりなり
小夜もく千色ふ解や琵琶家
小口門や夜の琴乃削りけ
一日ら帯もふれすなほれ萩
三日月や禁の言ふも分れ
永き日流面白くある夕の夕
港の上も浮のゆかり

閑窓

波傳く只みのむく二人
家流やいつも中へ流里の人
悔ふは看ふふらむは于弱

三停をよ出てるひあり初時
羅の斤自よそまき日傘
秋風のけりありあり波の泡
厚のや夕アの流の雨よある
万葉やまゝく織る小物の山
日のあめ音もまや干菜
東八月も念し西山ひう山
むめの花ををあやれやう草
柳木の房よつくる葉木家うさ
宮の日和や障りあつてはあそび
梅のむねはあそびあそぶあそぶ

三六

遊鳥

江戸

翠羽

上

里丸

江戸

白鳥

信

元芝

信

武日

アキタ

可貞

江戸

抱依

武

文真

茶寛

アキタ

可貞

江戸

酒女

丸聖

万機

護取

カミクラ

楳庵

江戸

松杜

利助

南長

其傳

前ハミ

岨岨居

如減してあけをひや初陸
一り家の阿をれは志は猫の垂
明星能のりよほしはあ立
野のころあころ小阿もあり危
杜宇のやひけしそ門冥
山花や四十六の夜花
輕烟や利根の夜雨漕急
辛峯の松花下も持たぬ
京ハ京の白ひえころけ
夜啼えみふあ勢之そ
垣石也や小松のわのけ

アキタ 菊二
アキタ 有交
アキタ 涼風
アキタ 塙木
アキタ 賈風
アキタ 渭南
アキタ 士先
アキタ 黃隨
アキタ 其雪
アキタ 可蓼
アキタ 北園

室より形等へ人ハ世のり
三條流ふ金をてんあ
雨くもあうも降る
落椿園をてんあ
秋のあつ涼ふくくみ
月涼しちもくく
雪はあまのほみや
初雷やお立大名の
貝もれはひもを
寸草切の眼
ひり長る若葉

アキタ 初欣
アキタ 松佳
アキタ 秀中
アキタ 楓二
アキタ 毛く
アキタ 乙調
アキタ 文拱
アキタ 曙堂
アキタ 元風
アキタ 士先
アキタ 心珠

三井の鏡身ふたたりわたり
ちりりく雪を落して清き露
涼風よ吹れて初より暮る
紫の戸は木の葉や麻の足さる
杉風の袖また海しし帯衣哉
お月やついでる山
海先とる雲とあやゆね
汲水のぬもまた清やうけ
思ふ心とて清しき水の先
鳴らぬ佛の音や鏡俵
夕虹のくらくをほろをる鶴

イヨ 其梅
元曉子
越 元雄子
石室
江 環山
江 花吟
房 雲漢
如雪
与山
川 女木
戸 文賀

雀とりて七日のくもは子
降ぬ中夜梅のちりり
月の影おしとて教は白梅
杜宇の吟もけりや我士の墓
むらさき糸帯のめりやとり鳥

因而の柳 寸風
上 芦邦
江 白舟
信 素雄子

死生有命

ぬも菊は阿含の月よ四十夜
垣より人の掛さるを都
後まきく角かくしり揚牛
風はむりり雨のすけ
糸裳の粒母もあやあし

女 法子
イ 国村
ア 其麻
武 柳葉
江 孤山

一ッ宛音の文や〜 結うゝ奈
 鷗の菓子ち〜 花うけて風流
 枯果の房や山を引よせ
 鳩は菓を骨斗り〜 武
 笹舟は急のつれたつ晴る由哉
 山茶花より〜 本庄
 向き合せて鳥の音多り結の山
 屯州系人の泣く〜 江戸
 洪〜 越
 去柵やをり〜 五雲
 葉のつる中 小梅は破家代
 江戸 一風

水際よ心〜 蓮花
 風の香は清〜 越
 冥ちとひ〜 知山
 降を中〜 和柵
 西月〜 桃矢
 白急八波の花〜 玉
 心厚〜 如拙
 累々日や〜 江戸
 白菊や〜 龜石
 雪の降所中〜 啓羨
 其のほけら〜 盛之

淋々紙はくむ杉のくまを
 角一おと落る二月の暮ふ
 屯の本此片陽の海をまためり
 常くくよそをみぬる二月の月
 中ふつけてるは巨魁の出つた
 飯けの味ひひよふ八咫の
 冬籠控るるまるとふあり危
 窓の秋能周らややの秋
 芳おくく人さすまふあ
 常よみましく薄を欠あり
 引れぬる及の記念や屯量

江戸 石
 サツテ 二双
 房 東翠
 大坂 篤丸
 江戸 竺舟
 信 一茶
 子寅
 志名井

四十一

杉亭の夜坐

月細く世の流れり
 胡坐の膝子迫れたの音
 羊瓶をくく者よをせや
 さひーれた市のまらぬる
 牛の脊子まら日影の照すし
 ねく雪のさきくし吹
 確と枕子控るる破あきき
 つあまの落し身と悔むら
 北涼く人氣の極きある

才雅

杉亭
 宇弘
 西舟
 亭
 雅
 舟
 弘
 雅

ちやう牡丹を賭す。元一
 差金の賦りと雷のえりり
 扇とふる水のすまはし
 寺よ信む心清き秋の月
 ゆりりの色成つらむ暮
 花風弓矢の業もけり
 かしらんよまてあそむ

亭 雅 弘 亦 雅 亭 亦 弘 亭

三
 聯
 加
 へ
 る

関口の寮よ冬暑を過す

涼風の田よりあまを
 置森のさむむる帷子の月
 凌霄子七日の竹の毛堂て
 秋葺く乾く火子様子り
 猿人の懐かき兒やまみ
 松のまつれと巾の出たり
 禅よ茶子叶ふ一字の額すて
 羊を忘るる花の思ひも来
 あむらつよ雪の降おとゆれ

何丸

曹阿 万里 逸山 仙鳳 寥和 桂水 崇山 花城

名のみ音も何いなるの無さ
うたふれあふもや楠子注連
屋柱の鳥の思事糸ある
蜷むく鯛鉄の丹のまひ返り
あまうつりのかえん本るくち
瘧山の秋をうらみ三年流る
秋路の終り胸さやくし
ちる花を内侍う袖子うけ留て
あろあこりく襟の羽か

素雄
里丸
元風
栲山
有夜
雪彦
翠羽
元曉
執筆

鶯のおし仕也いあや百ふ鳥
いとも柳の風ワくくろ
菱笠のかすみよあし大堤
山片ちてメ帆を川
荒壁よ月の夜遊走う
萩のさうをまよふさうか
津よの忌よう用カに延あ
鮫の竜を休る川の切
お賣のつよくも残し履

仲凡
斗石
魯川
南山
石
川
山
石
川

落し流くうに人をま川
 ち龍め平川のまに坂をて
 佛光のまをまらりり
 有り月のまをまらりり
 まに向らていりる 埴原
 け秋も遠くとまらり酒の敷
 年しづにまらりる 龍医師
 初龍のまらり花をまらり
 まらりもむらりまらり

山 石 川 山 石 川 山 石 川

採茶菴とて

年くまおる人 庵とてまらり
 竹とまらりまらり 万 里
 月とまらりまらり 民 玉
 きとまらりまらり 里 丸
 すくとまらりまらり 万
 清水のまらり板 何
 悠まらりまらり 里
 まらりまらりまらり 民

何丸

雉の田子かれ遊しも茶の烟
雨の水鶴子おちひ志川むら
君も鳥の流も丸くまうし
帯よおちふとちい次 袖笛
白洲のまじく 敵も有明て
目張するそとを 啄く山崖
著書そとくも 余とつを死く
花さつくとて 我もとつをむ
層見子揺らも おちれまのそ
所々跡よよとれ 雛の 長持

万 仟 民 里 何 万 里 民 万 仟

上巳の奥

雛の初かいつく人もそれ免
たうしとまきと石ハ山吹
雉の移り 笑きぬやま川銀
きののけ風を思ひ持たや
檀持のうけよぬたさ露の月
秀をとるたてし 麻の雪あり
柴負くそ秋のゆたたりし
終るもなき、る白乃唄
人のちけ濱て六てふはたらきよ

紫園

魯石 抱儼 理堂 野竹 仙芝 舜美 石儼

入梅の志すく成るす。傳を
りり故の脊子波野々
都をむけてあひ、並に
跡筆も流る。いさる者年
る子喧嘩此處もむすり
感落す本海山舎子夕鴉
お如の港よ梅思くまや
月夜のあれをそ任の果る
梅津の春融いりある筈

堂 公石 芝 看之 芦維 清子 美 何丸

月院社郎事

形くく縁者の出果え梅花
さくさく雀代も新もせ
双六は彼處休け旅ついで
春のト流をとまやけ鷹
岸く流く水へ下しる月の暈
有馬此秋の一とりあら
纏網の魚の刺より
うさくさくすくえ抜の款
さる名成りたる情の流りぬハ

子將 伴丸 將丸 將丸 將丸 將丸

枯子むしるたの下草
 赤穂不流ゆ子指を柱立て
 西海洲鶴の時もとけさす
 朝月夜雁忘れよつろく
 秋合せしる新しきの序
 武佐邦子ぬろ子の粒を木切覚
 あくし子深く馬き耳さふ
 山くね花子角か波の音
 田よりしれ抄ひ巻の乃翁
 将丸 将丸 将丸 将丸 将丸

仍と因る立目も濁るや春の水
 枝の鞠くそと大風の居りた
 飛込て月を浪りつ 蛙の子
 春のまのそつそ落る枝は
 梅々香散ふりちるしり馬の耳
 管のまこれ先あるありし山
 ちる管の風は暖斗くし梅のむ
 黄咲て小鴉一ツの世帯か
 ま杯の深よふくや京の風
 味まふや頻子成来鼻乃先
 言やんもうれてけ如梅のり
 子将
 一扇
 辰二
 林枝
 寛山
 一得
 石
 鳥明
 素明
 寛山
 石

石の明れみ汲刀自や花のり
舟をよみあうはし女を 朧月
白臭を不二の輝とんぐく
ニニふと 押の丈乃 零の那
子よとくまられて 杉林一昔 雛
花の枝 籠踏をさちうく 式
菜の屯ハまろく 見菴の詠子
雨とくくし 峰の炭の起るこ
よの年と 梅の旭まをそえく
むきくしよまあ 合わり 東山
菽入や 梅三尺の物 沈

知
一
子
雨
月
磊
其
双
寛
聖
魯
庄内
文未更
天
田
菊
利
千
不
市
甫
一
松
梅
意

梅よりを折かきの有るもみちうな
秋涼く来斗了 野も軒の鳥
うつくし月月の居りせ 稻 道
夕暮残して 立ぬ小田の 吟
彩若や 是もも人の好不 母
蝶の出て 古めく 豊るを 枕か
山水の 麓を 子花 居るの 南
窮んや 上むへの 風ハ 何れの 冬
月 沈や 浪もて あらふ 玉 柏
朝息や 一ツ 嘆ても 秋の 色
浅芽生や 枕返せも 如 亭 屯

以左見
天
田
菊
利
千
不
市
甫
一
松
梅
意
アキタ
仙六園秀
アキタ
江戸
東金
九十九里
サツラ
房天律
炭上合
信山一
一
松
梅
意

おくして十^一く^一事ぬやう花 別大ハニ 吟
う^一了^一氣の小雨^一あ^一花を^一哉 下サラト 吳山
水^一けて^一んれ^一を^一め^一ん^一 ミツケ 梨柳
秋^一風^一や^一直^一の^一跡^一尾^一筒^一より ミツケ 自放
夢^一多^一を^一嘴^一む^一か^一秋^一の^一這^一入^一り、 西庫前 賞谷
一^一枝^一の^一雀^一の^一あ^一や^一株^一の^一彩 西庫前 賞谷
あ^一き^一有^一り^一と^一人^一草^一を^一詠^一め^一り、 西庫前 理堂
江^一の^一島^一を^一画^一は^一して^一亭^一子^一胡^一坐^一外
その^一も^一乃^一も^一う^一ん^一も^一あ^一よ^一な^一ハ^一す 武本庄 幽山
吹^一さ^一る^一れ^一花^一の^一果^一や^一鳥^一雀^一の^一甲 丸山 双山
花^一系^一錢^一の^一あ^一る 武折ノ 蟬
堂 の 蛭

接^一木^一する^一ろ^一ろ^一を^一あ^一き アキタ 文舟
並^一し^一木^一子^一愛^一着^一の^一を^一花^一柳^一哉 アイツ 如髮
赤^一心^一花^一よ^一う^一つ^一れ^一ハ^一ち^一り^一 サツテ 不玉
鶯^一や^一雉^一子^一よ^一う^一つ^一る 上ケ 連南
恙^一中^一の^一目^一も^一尚^一ぬ^一 上ケ 自放
兎^一犬^一の^一面^一も^一も^一れ^一て^一日^一の^一永^一夜 上サ 千之
雉^一子^一鳴^一や^一雨^一の^一と^一き^一れ^一の^一茶^一臼^一山 上ケ 与山
を^一嘆^一て^一や^一ー^一き^一の^一ハ^一財^一布^一 上ケ 無名
風^一除^一も^一あ^一る^一 上ケ 嶺松
腥^一を^一風^一も^一あ^一る^一 上ケ 浮月
狹^一牙^一舟^一や^一も^一の^一上^一 上ケ 白

画心の雨や柳のうらやう
 元雄
 橋引て森の小家あり
 柳馬子
 置さるゝの思ふあはれ
 崑崙居
 杉風もいさよきし
 香時庄内
 一柳
 石白もあはれつあはれ
 蛙人
 雛子鳴やニ荒くも
 徳二郎
 子将
 梅有しとるる海士戸口式ヒタチ
 月滄
 むよ森のあはれおこ
 アキタ
 珀賀
 鶯の口あはれ
 のとくし
 溜貞
 森て居る人
 の記さし花散
 いさは
 指く鈴をくへ斗
 雛の家
 フカ川
 文柳

春山の色ハソよ及たる
 杜若ミハル
 春嶽
 堂らやいとくあはれ
 鬼の口
 藤後
 楚雀
 新夕を古さぬ夏の中
 木也
 玉美
 破中の花よりこく
 波の光
 文窓子
 森心のやあはれ
 失て蓮の散
 上田
 公杆
 蟬鳴やとるる
 起
 禁所下ケ
 杉香
 涼しとるる流次
 方の色
 大ミヤ
 嶺松
 首教のむ子
 休むやあはれ
 神
 舟岡
 以左波
 中干の
 一石や
 森の山
 色
 田哉
 出ぬ
 月の意
 一
 森の山
 三
 山
 春
 観山
 鴨川の水
 花さよ
 七月暗
 フカヤ
 融松

風景の肌をかゝるや過ぐを武折 彈 蝶
 夏もちやそら丸おろせて夢芒 庄内 吟 砂
 嫁入馬徳妻の中を過りけり サテ 不 玉
 笠陽屯の水色よゆる夕暮て 武高岩 重 喜
 去迹に暮の行舟や飛鳥川 西丸下 磊 石
 嬉しけり酒井を鳴る津野武 下サ 吳 山
 中東の皆ゆるみりし懐時雨 子 将
 葛の系ふふ葉書すゝお山清あり 二本松 倒 水
 暑れた日の袴も隙とふらふ色 老六天 朗 亭
 抱え就はあすの大変を誇おふより 下谷 嘉 山
 水音も矢以を量る照射うま 元 風

琴の音の鳥と思ふぬ山崎武 知 足
 高安の妹もそやほや七若菜 寛 山
 元日や鼎を煮へて雨をま川 ヒタチ 湖 嶺
 を煮文人の心は花買む 柳 至
 煮むし日や人のちいさけ嫩の彩 鶏 里 子
 打、煮は音もゆへて日永代 上ケホ 黒 白
 苗代の深みもあすお指の帯 常 盤
 雛の打ひまふ届うてやるをふた 翠 山 子
 食玉の美くつくんむ川の松 ヒタチ 壺 鱗
 亦おして跡のぬる花柳り哉 子 将
 投やりも笑く斗る梅の意 本々 恭 寛

ちる梅や日午やうの山仕度 浮月
 骨おそくもどれも落る梅少 磊石
 尾のそいさう歌くや木芽漬 翠羽
 瓢もも音あるも花ハおそくちる 春大崩 畚玩
 衣くしもん返り梅少りも 吉原 園秀乃 花染
 削りけ梅少き門もまきまをし 之愿
 ちる坂や杖の先もまきま 父カサキ 玉芙
 う靴形の一人もんぬひもかた 公石
 つくしも靴見や仕也雛 西尾前 新甫
 雪少すけ梅少きまを山七好も子 スハ丁 白水
 おの事皆花よ来 赤生也 武了岩 重喜

ちれもも靴少きも交るさうもか 十カッ刀 石棧
 迷ふもも乃の梅もや落し角 東金 利中
 春おそく梅の室もおそく 旭菜
 雛のおあはれ白髪をわさく 了キタ 雪簑
 梅少しさうも 詞了も 溜負
 ち羽子や春の日脚も暮安き ヒタキ 木翠
 春の心せぬもれも路も解れ也 仙大 淇竹
 音梅も印ゆる音の届きも 上テウ 圭芙
 簪も貝売もさうも汐干少 庄内 秋冬
 出代の神もさうも 洞也 百川
 漱きもも交るへー 新能 大喜 民芝

春一矢めたるふやぐ霞山 下ヤ 嘉山
ふらえを梅の科も仕く危 瑞ツ 市交
おえけし春の姿よ雨の厂 日本ニ 嵐松
一と痛し人々望向の覗 上キタ 在府 梅佳
木芽なる人々中よしやもの鳥 ツクト 可寥
世ふせいの裾も枕も萱 エチコ 南呂
古里と筆の先ある余を セウラ 汀月
出代や袂みかく次沖の石 西丸下 磊石
一人見て独言い少極 多言 松声
君々代の上燈の極嘆と 上ケ 畚 玉 笑
足ぬるい水ぬ知てや 下 雨 芳篇

稻神の鈴もきけ 上ケ や春の風 ニタ山 嵐占
修て戻る心り友の咲ふ コミ 宇弘
漁火や明女見あつ風の ワメ 石末
きくすえく鯉のかく 羽 日傘 毎ラカ 伊九波
蜻蛉 毎シ 可貞
蚊屋 九山 月川
ちや夏とあ 下サ ハ月の 下 夏 下 雨苗
灯火の細も 下 移て 下 すみ 下 南枝
夏の月取 下 並橋 下 茂 下 忘 下 ぬ 下 南口
抽の花やか 下 了 下 北 下 時の 下 高 下 白 下 山 下 子将
栗布する 下 詞 下 の 下 も 下 や 下 け 下 の 下 子将

麦出まきてさきくし信し菽の質

白水

糸柗子妹う羽衣けりてり

芝方

柗至

能夜やつれど兒妹う 記心、雨谷氣月

杉風子似て笑ふ斗り苔澁る

庄内

其花

子乙女の行儀前をぬ直鉤、可了

蝶々の伴るよあむ文衣

土ウラ

万磨

配膳の袖も袖の白り

シテノ

秀州

卷藁の弓勢入梅尔く

アキメ
梅佳更

観山

多心よ入梅知る石の墨

維石

地の疲を色ももんまぬ牡丹

白水

海の龜さめぬ子老れ初杉魚

童喜

惟光とすそくく杜宇

ユキ
ワタ

石棠

字結ひいてる時鳥

大子

壺鱗

芝雜魚の直子杉若ふ

南呂

物之を岩子そくや宋古

サツテ

不玉

うた人をせせとらす扇

翠羽

音々の隣く宋呂

武本庄

幽山

花咲も梅子かくすや表のく

アキメ
麻屋

楚雀

五月雨の月と森る笠か

仙窟谷

春潭

萱白子茂れハ暑く忘れ物

ウラハ

南口

玉人の芳れ眼のり若る

大官

白水

葛もや楊枝の先の風の

嶺松

漏雨残片きてつら
夜納涼や京を嘲の多い
涼月やの、字子あろ
籠あや木よと月の
涼風一身を任せ
杜々暑くくあ
庭まよひか
わらわら
瓜参のちみ
涼一とや
後の真砂と
山 圭 美
子 山
層 内
枝 文
可 了
玉 之
不 玉
子 将
鳥 明
松 松
富 屋

夕浪お山の影お
初風の駕よ
をぬ香や羽
は春も
昔柳や
蝶飛て
花を見
この氷
ちる
棒女の
山 嶺 題
吉 田
千 里
汗 采
全
千 里
全
卅 文
雨 苗
全
全
休
紫 桂

吹ぬ日と移つてくえゆる柳哉 上テ 山杏
 山寺や木芽曇の境のなる 系郷
 建家を祀ふすまじて梅のなる 九峩
 長果の梅原子入や メ鳥 全
 陽空や海芽の水の行滞り 麟亭
 管よせうれて雪の消そく 羽七カミ 楓 谷地 二
 月と日尔あや有や夜のむ 全
 妻意よわか路橋の夕も ヒタチ 勝 下堂 保 全
 むつちや産酒盛 春の雨 全
 横を 中 や 山 さ 長 雨 谷 弥 月
 雲ら か 道 の ち さ よ 山 櫻 い 惠 水

春の猿又すそる山 ハ ち ウ け ミ 菊 兔
 管の 乃 び ち し 三 声 を う へ たり フカヤ 加 茂
 白ひきよ さ や さ ね の ち ヒタチ 壺 鱗
 長果 し や 汝 子 任 ず る 長 成 シタヤ 沱 川
 戸 ロ 外 の 妻 の 時 の 呼 子 将
 屯 あ ひ て 素 一 や 伏 之 の 庚 半 タカサキ 玉 芟
 初花 城 折 て 呉 々 坊 々 妻 サツラ 不 玉
 毬 あ ぞ を 押 入 女 子 下サノテ 兩 苗
 着 中 や 田 一 を 洗 ふ 忘 あ 寛 山
 空 低 一 田 一 以 白 の 水 ぬ り 菰 菜
 水 む す 一 西 捲 指 も 白 魚 水 庄内 紫 染

鳥子もまける氣ハナ梅歩二川

竹根つめつけ水も梅の花も信十カセ彩里

雀子や花見ニ市ノ終乃上元雄子

草席の中リ柳ノあく人半元風

防冷のまくもくん菜一反小金井其翼

友の笑朝やくもる旭のあう盛之

接多して行令よ人やむの心芳蘭

永き日や水踏まる人籠の鳥朱子聖魯

海苔飯や梅の腋ハ酒ハくし我ミツケ杉亭

かりく火を又袋手春の世居くニハ下一笑

花の山の紫の鬼ハ赤ハくスワト白水

鴨の声杉敷の芦ハ枯又くマ重丸更月川

足りの言や不のうみ雪明リ九十九更露石

糸の平子見るや花に花に花之愿

小喜中や捲リ浩希ももの亭政風子

流れ木子を嘆素のあくくヒタチ柳至

子りかる心ノあく水や竹千鳥全湖嶺

枯枝もくもく梅や夕雨雨露一水

居坐水を灯火ゆゆるまおおかる内紫染

ねひささし丘もまむくや雪の色二瘧橋

身よつかの言をまらしやままいん五千コ東く

茶の花やよい子持る山の歌
 子将
 す掃の小楯よをや小葉垣
丸山
 困水
 楯の火よ赤内のをよ此掛る
産屋
 因山
 世を丸く是よ赤老の从中
下谷
 嘉山
 竹をぬ部して居るや茶喰
吐侯
 嘉山
 さる月か吉きなにし冬あり
 吐侯
 風子ゆりこちれりり水の月
 嘉山
 本枯や引する牛のまを塩
 寛山
 竹曲る垣も小春のあま
 元風
 藤系せぬ
杉枝

浪柿もかきへる袖子吹れ危
二本松
 淵水
 焼火して秋を磨む山家か
菊丸
 林の蝶鳥泣水もまより
アキタ
 珀賀
 迷栗を掛あやしき童うま
武古那
 吹雀
 踊りつれ赤死人の来もすやと
羽大三
 吟秋
 中五系茶葉のうゝ照かす
 子将
 秋立や三十棒の痛の跡
越スハラ
 一松
 侍意のよそくしきまの月
タカサキ
 玉芙
 紙屑を嵐の荒るおちるか
武本虎
 松馬
 はの月本絨の果よ出りり
下サナテ
 希卷
 きしくは鞍返る灯の垣も浅
 旭菜

ちんくともあまの影も秋日和 信東五 五柳
 も死あの外を西本のかつら 年礼 梅甫
 斗馬ホもさうの多し里の秋 千ウ 炭松
 咲らふのもよ層あ赤中葉菊 クナ 雪羽
 末枯や穂をこあひー境の夢 友以 繪將
 須解屋は強ゆるま秋の條 友以 陶丘
 鳴志きる竈中の中や外庭 友以 島屋
 十あおや影も勢くす一坐あ エケ大百 栖笑
 七後よくくあ 上ケ大百 龍園
 鳴るおの鶴や紫苑の先家く 高小川 梅史
 月の雨 友西北 のそ死 友西北 いうらむ 柳系

青空や 仙大 山のお照さる 仙大 桃詠
 馬士の喧嘩出 伊豆 花木権 伊豆 立総
 魁大の條 唐 花の屯 唐 一柳
 目よるぬ秋 ヒタ千 下坐 萩の昆 下坐 勝保
 秋の名の雨 信 かつら 川 越中
 中もあ 南 枯ら 呂 風五月 南 呂
 水よあ 月川 秋の活 更 よお系 士 先
 弁むの穂 緑 子や蝶 普 の存 藍 下 藍
 ちせ 民 残 是 みの雨 是 音 是 委 是 真 是 の園 是
 中 本所 賣 常 の鳴 笑 きて 笑 たり 笑 や月 笑 の門 笑
 夕 立 空 川 やむ 浮 世 月 を 月 戻 月 り 月 鳴 月 比 月 丘 月 尼 月

華子強切く乳のまじり
 鴨の目よと長浜一也陣を火 ヒコ千 旭美
 雪ふるまよせざるや月の出汐連 西口地 一斗
 杉風の吹細くく曲くも 子 寅
 如夢も飯よ席よぬるの上 子 将
 子もあも唐めくえお郭公 上 里仙
 昨礼の登よ有つく木樵 サテ 不玉
 君く代や珍麻の鬼七百合のた ヨミ 以文
 曉の葉ち窓や 今泉 近舟
 引くる鮎を目をたてて睡る ウチ 嘗谷
 白露ハはしてのほの名 別大 吟秋

僧一人大真草々原を耐雨り コ今泉 近舟
 押合をてふるな鳥や オク郡山 徳道
 戸はまを 秋田 吟は
 木枕のつめ 六 汶柙
 手放しと海の日 武人 一呈
 山の枯え 信 岫水
 古塔の燈 左 柳至
 雪の日の実 上ケ大 龍園
 鴨 ホツ 魚川
 森 サル 抱風
 地 エ 抱儀

管絃や萩と佛日小彩あきふ
 ありし児世るの面や牧の栞
 松風の蹄の海も氷りし
 華のまよふ影くの時雨に
 尾細く氷魚の使子り今女
 あまの葉焼屋しりお時雨
 大佛の侍ゆきもわて神鼓
 括して雲もささめぬ柝外
 大倉かゝるるはしと下田
 紙箱して雨の色んる。時るふ
 山水わ川の平よまきて氷の

全
 仙芝
 完哉
 勢竹
 理堂
 天々
 陽成
 元洲
 元風
 素十
 子将

武蔵世やまのたまふ秋のたふ武
 鳴あふ日たつてまきし聖菊小
 橋本やをのれかきと散あきふ
 高きあきふるまもつまや三井の障
 明月や朝鮮の海眼のあきふ
 杜宇の梅の昔ををけや月
 散をの流氷てけそ口惜花
 湖をふくやそ雪のあきふ月
 立竹や萩よさつては條の糸
 秋風や頻よすうに氷白髪

五繩
 文眞
 五丸
 利助
 家道
 桃李
 如醉
 月窓
 曙来
 松杜

人まほしのやうなおむや三日の月
象深七形やとそんる山朋梁
天井は目のつく雪の旦哉
系ふく丸の序もおさぬ小橋哉
松よりの上るそ先や三日の月
新宅や隅くまもも照月お
枕あぐも花をこい野井
元の流子水とさうして存の月
そよめうらをさよふらん川流や
松もけし地と塔やまの能
枯枝を折新とく鵬のまう

抱儀
清子
芦籬
理堂
仙芝
勢竹
一丸
看之
應考
黄随
魯石

三

鳥や何よりけても山の春
岸うらむか時音おとつめて
杉焼柴の船借心ほの月

英夫
家雲
舜美

當年一胃草席 初てまつたあ夕の多少も
まうかぶくま上院く清か吟ま滞よおよひ
出板延引よお奉赤面を極くし何華春年ハ
奇次才子彫刻よ取をり日限の通出板仕人宵
早春より清出吟の社を羨み

月院社

執筆

養生要の心得

天を子と受け地を母と受け人を賓とせざる
子不卧し寢不静し必氣を休む友人を萬物乃
靈とせしめて事と又天地は次くそれる遠れより
伏たつてありたらん今の世といふことなる僅か
半百をこえて人壽八十年をこえてつらしてこれ
申えをと思ひやれぬ喜怒哀樂は精神を平寧に
飲ん合はるる天を命とせしむる氣をこへしめぬ
山野をこへしめぬそのあるは世をこへしめぬ
庭を不静しめぬる屋敷をこへしめぬ或は酒を
飲んば皆是れ私をこへしめぬ害をこへしめぬ

禽獸中其真者なりしがこのこゝろに
しるすべしとて好まらむ
しるすべしとて好まらむ
しるすべしとて好まらむ
時の変を心得るは春の毒の毒
運ぶ意を度ふ即ち疾即ち遅く起す
即ち起すを起す疾即ち遅く起す
是生長の気の理あり即ち時を南の秋
して陽争をさしけ起す時を健気少
しと陰氣を盛んぬる
是の日のあはれは
く遠くを遠く
疾即ち遅く起す

香露 髪をたし属と連ふ利く
水も属とぬるは
よも属と 萬病を
火気葉とす 柳松柏竹 榆 松檜葉 是之
次すは 五葉の 和をさす
酸は 酸は 酸は 酸は
井の酸味 春の 秋の
又 又 又 又
是を 是を 是を 是を

辛多れ可也 肝はばしりたつて 臟腑を傷む
血を失ふ 氣の身多きを 時を 腎を 肉を 肝を
心を 猶ほ 肺を 肝を 心を 腎を 肝を 心を
辛多れ可也 肝はばしりたつて 臟腑を傷む
血を失ふ 氣の身多きを 時を 腎を 肉を 肝を
心を 猶ほ 肺を 肝を 心を 腎を 肝を 心を

辛多れ可也 肝はばしりたつて 臟腑を傷む
血を失ふ 氣の身多きを 時を 腎を 肉を 肝を
心を 猶ほ 肺を 肝を 心を 腎を 肝を 心を
辛多れ可也 肝はばしりたつて 臟腑を傷む
血を失ふ 氣の身多きを 時を 腎を 肉を 肝を
心を 猶ほ 肺を 肝を 心を 腎を 肝を 心を

たゞまゝにして百病の長きことありては病は病なり
けしきありては春風うらやみの疾に化業ありては虚命の人
みちを過しんば色を奪はんとて肉を脱せしむれば
こゝろの病に況や體肉業業の相対ありて業は業なり
此疾の動かし得たり唯とて百病の門守りて慎むは
頓病の死する毒の致と處人病ありては死する毒の
ありては飲食を倍病の対ふ地は寒自若く冷暖よく押す
らそ不審なる病の自然の天命と保つは海とて水は
實より病なり人たるは死を免るべしとて又虚
は病ありては死を免るべしとて死命と
ありては死を免るべしとて死命と

六十翁

何九

自誠二句

守口如瓶 吞冷小命をば免る朝露

防意如城 月夜たふすはば免る朝露

徳家大人春年二句

是中火也くつるれ 孫小春 公石

柩かり粟歯よあすはるあかり 子寅

何れもあつて六十の笑とてあつて
何れもあつて六十の笑とてあつて

人言之者神仙在
六十年之矣
時之也老人



茂名氏二十其美とて
松島美事とて

松島保之

形如—はの色好ふ

形如—はの色好ふ

形如—はの色好ふ

帝

國

月

月